

ナーガールジュナと仏塔崇拜

岡 田 行 弘

1. はじめに

近年の大乗仏教成立に関する研究の中で画期的と評価すべき業績は、袴谷憲昭氏の「悪業払拭の儀式関連經典雑考」という一連の論考である。¹⁾氏は「悪業払拭」(悪業を懺悔して滅する方法)を考察の中心に据えながら、仏教の「思想」が次第にインドの「習慣」によって侵食され、論理的な両者の対立も徐々に解消されて、最終的には仏教がヒンドゥー教に食い尽くされたことを論証することを意図している。²⁾特に大乗仏教の台頭について、仏塔崇拜が伝統的仏教教団と密接に結びついて展開したことを明確にし、「大方の大乗仏教というものは、仏塔崇拜を中核に置き、管理人などの出家者の仲介のもとに、厳格な出家苦行者を精神的権威として、寄進者である在家者の靈魂の解放を謳う、通インド的「悪業払拭の儀式」にほかならず、(以下略)」と述べ、大衆運動的な性格を強調する。³⁾また氏はナーガールジュナについて「僧院にあつて仏教の正しい思想とはなにかを追求していた出家者(特に説一切有部)は、俗説を真剣に取り上げることなく、アートマンは蘊であるという主張命題は守ったが、蘊によって代表される法は有的に捉えられるようになった。それを批判したのがナーガールジュナであり、彼のような批判的な出家者の中には、当時のインド的習慣をそのまま反映したかのごとき役割分担の「正しき」を批判する人もいたにちがいない」⁴⁾と指摘する。袴谷氏の所論はきわめて説得力に富む。しかし、もしナーガールジュナが縁起に代表される仏教の思想の正当性を論理的に追求すれば、その結果として仏塔崇拜の否定に帰着するはずである。それは文献の上で確認できるであろうか。

また仏塔崇拜に関して杉本卓洲氏は、それぞれの部派に伝承されている律蔵や初期大乗經典の記述と考古学的知見を比較検討した論考を公刊している。⁵⁾そこで明確にされたことは伝統的仏教教団と仏塔との深い結びつきである。在俗信者ならびに殆どの出家僧尼にとって、生天・梵福・涅槃の厳密な区別は無く、またブ

ラフマーと仏陀の同一視も見受けられるのである。⁵⁾このような状況を考慮しながら、ナーガールジュナの仏塔に対する見方を検証してみる。

2. ナーガールジュナの伝記と仏塔

羅什訳『竜樹菩薩伝』には、出家の経緯について彼が「もし自分がこの危機を脱したなら沙門に詣でて出家の法を受けよう」と誓った後の様相が、次のように記されている。

既出入山、詣一仏塔、出家受戒、九十日中、誦三藏尽。⁷⁾

このように彼は部派名こそ明記されていないものの、仏塔の有る教団で出家している。この受戒について「正規の具足戒とは認めがたい」という指摘もある。⁸⁾しかし、ナーガールジュナは『十住毘婆沙論』の助念仏三昧品 25 で出家菩薩の日常規則を 60 条列挙する時、第一から第十一で戒についての注意を示してから第十二で波羅提木叉戒に随うとしている。⁹⁾『ラトナーヴァリー』(V. 1) でも王に対して、王としての行為が法にそぐわないようなことがあれば、出家して正式の具足戒を受けるべきことを説いている。すなわち彼は伝統的な仏教教団で出家者となったのであるが、ここに仏塔があったということにまず注目しておこう。さらに伝記は大乘經典に出会ういきさつについて、

更求異經、都無得處、遂入雪山。山中有塔、塔中有一老比丘。以摩訶衍經典与之。¹⁰⁾

とあり、ここにも塔という言葉が登場する。仏塔は仏滅後の仏教徒にとって、生きているブッダとしての役割を果たしていたと見なすことができる。¹¹⁾ナーガールジュナの伝記の中で大乘經典とブッダの直接的結合関係を示すためには、ここに塔という言葉が必要不可欠のものとして要請されるのである。

3. ナーガールジュナ著作中の仏塔崇拜

彼の真作と認められている著作の中で仏塔に関する記述が見られるのは『ラトナーヴァリー』¹²⁾・『菩提資糧論 (本頌)』・『十住毘婆沙論』である。これらの記述を比較して見ると相互に共通している部分も多い。¹³⁾彼が仏塔に言及するときには一定の型があると言える。それらを順に検討していく。

a. 三十二大人相を獲得する手段

『ラトナーヴァリー』では三十二相の第一、手足輪相を獲得する手段として塔の供養が説かれる。¹⁴⁾

仏塔 (mchod rten) を供養し、聖人や長老達によく仕えることによって

王よ、手足に輪の印のある転輪王となるでしょう（Ⅱ. 76）.

これは『菩提資糧論』の

於諸法事中 随順而佐助¹⁵⁾

という本頌に対して自在比丘が「支提等を修理するなど法事を尊敬の念を持ってするので、手足輪相を得る」と釈しているのと同趣旨である。なお『十住毘婆沙論』共行品第 18 では園林等の布施や塔を起こすことによって身如尼俱樓樹相と肉髻相を得るとする。¹⁶⁾

b. 神通と仏塔供養

『ラトナーヴァリー』Ⅲ. 92-97 では六神通を獲得する方法が説かれる。このうち天眼通と天耳通は仏塔の供養の果報である。まず

仏塔に灯火の輪と、暗闇と灯明と、

灯火の穀物油を布施することによって天眼が得られるでしょう（92）.

と説く。『十住毘婆沙論』共行品第 3 偈でも

燈施得天眼¹⁷⁾

とし、『菩提資糧論』も燈輪で支提舎を供養すべきことを説く。

作種種燈輪 供養支提舎¹⁸⁾

釈はこの果報として仏眼が得られるとする。次に天耳通について

仏塔の供養として音楽・鈴を布施し、

法螺貝と太鼓を布施することによって天耳が得られるでしょう（93）.

と説く。『菩提資糧論』は、様々な支提供養の方法を次のように挙げる。

掃塗與莊嚴 及多種鼓樂 香臺等供具 供養於支提¹⁹⁾

この本頌を自在比丘は「鼓樂供養によって天耳を得る」と釈している。

c. 仏塔供養の方法

ナーガールジュナは『ラトナーヴァリー』第 3 章で仏教の社会政策を説示するが、第 31 偈以下で三宝に帰依する具体的実践を述べる。まず仏像・仏塔・僧院の造営を王に勧め、さらにこう説明する。

黄金と宝石の網で諸の塔を覆いなさい（33cd）.

金と銀の花、ダイヤモンド、珊瑚、真珠

サファイア、瑠璃、大青石で塔を供養みなさい（34）.

次の『菩提資糧論』は上で示した 33cd と同一である。

及作金宝網 羅覆於支提²⁰⁾

なお律蔵の仏塔に関する記述の中で室石類の供養物が個々に列挙されるのは説一切有部に属する『十誦律』である。すなわち、

莊嚴塔法者、(中略)金銀真珠車渠馬瑙瑠璃頗梨等種種宝物、如是等妙莊嚴具、是応供養塔。²¹⁾

とあり、『ラトナーヴァリー』とは宝石名に関して若干の相違はあるものの、富裕層からの供養の実態を読み取ることができる。

d. 『十住毘婆沙論』における仏塔の意味

『十住毘婆沙論』は『十地經』を注釈するという側面もあるものの、『郁伽長者經』『般若三昧經』などの大乘經典の要点をまとめ、在家菩薩と出家菩薩の行法を説きながら、後者の優位性を強調する論書である。²²⁾ まず釈願品第5は初地に入った菩薩の十大願を説く。その第一願は諸仏への供養・奉給・恭敬である。「供養」のひとつに起塔廟を挙げる。²³⁾ 次に菩薩の様々な行業を四法に分けて示す四法品第19の最後の部分では、『十地經』の初地の所説を要約して、十法にまとめ、これを行えば、初地を淨治できると説いている。²⁴⁾ その十法は信、慈、捨、無疲倦、能知義趣、引導衆生心、愧、堪、供養諸仏である。²⁵⁾ そして供養諸仏について、衆生が仏を供養すれば利益する所が多いので菩薩は「衆生をして仏を供養せしめんと欲する故に即ち自ら一心に仏及び形像舍利を供養す。衆生は信受すれば即ち効に随って仏を供養し、人天の因縁を種え、三乗の菩薩に住せん」と念じて行くと説明する。²⁶⁾ 舍利供養が初地における菩薩の行法の一つとして位置付けられていることは注目に値する。

また在家の菩薩が塔寺を訪問する際に仏塔を礼拝する模様が入寺品第17に見られる。²⁷⁾ これは『郁伽長者所問經』に拠っており、²⁸⁾ 仏塔に敬礼して次の三心を起こすべきであるとする。

- 1) 自分もいつか人天の中で供養を受けるであろう。
- 2) 舍利を世間に流布し、衆生を利益しよう。
- 3) 今、大精進を行じ、やがて無上菩提を得て、無余涅槃に入ろう。

このように仏塔の礼拝は、在家菩薩の究極の目標たる成仏への意欲を増進することと結びついている。ただし、出家し正式の修行に入っている比丘に対して、仏塔を供養するだけで成仏できるというような説きかたがなされていないことは確認しておく。

4. 結語

以上ナーガールジュナの仏塔に対する態度は次のように整理できる。

- ・ 仏塔供養によって三十二相や神通力などが獲得できると説き、布施を勧める。

様々な宗教的勢力が存在している状況のなかで、彼は在俗者の宗教心を汲み取りながら、仏教教団の勢力拡大を意図したのである。

・在家菩薩に対してはブッタに代わるものとして仏塔を供養・崇拜することを説いた。仏塔が彼らの成仏への意欲を促す機能を持っていると考えていた。

・『ラトナーヴァリー』第五章に示されるようにナーガールジュナの成仏道は「出家受戒し、煩惱を滅除し、²⁹⁾ 十地を経て、仏地に至る」ことである。この過程において仏塔供養は初地で行う十法の一つに過ぎず、作仏に直結しているものではない。

要約すれば、ナーガールジュナは当時の仏塔信仰のいわば雑多なあり方³⁰⁾を整理して、彼が宣揚しようとする大乘仏教の中で一定の地位と機能を与えた。縁起説や無我思想の「正当性」を論拠として仏塔崇拜を否定するような記述は見られないのである。

1999年8月22日

- 1) 袴谷憲昭「悪業払拭の儀式関連經典雑考 (I)」『駒沢大学仏教学部研究紀要』第 50 号 (1992, 274-247)。「同 (II)」『駒沢大学仏教学部論集』第 23 号 (1992, 442-423)。「同 (III)」『駒沢大学仏教学部研究紀要』第 51 号 (1993, 337-298)。「同 (IV)」『駒沢大学仏教学部論集』第 24 号 (1993, 434-413)。「同 (V)」『駒沢短期大学研究紀要』第 23 号 (1995, 95-127)。「同 (VI)」『同前』第 24 号 (1996, 67-91)。「同 (VII)」『同前』第 25 号 (1997, 107-132)。「同 (VIII)」『同前』第 26 号 (1998, 91-113)。
- 2) 袴谷「(VIII)」92 頁。
- 3) 袴谷「(III)」328 頁、このような社会的宗教的背景は大乘仏教の成立時期にとどまるものではなく、初期仏教時代も同様である。奈良康明「「出世間」と「世間」—インド仏教文化の構造理解のために」『パリー文化学の世界 (水野弘元博士米寿記念論集)』(春秋社, 1990), 179-200 参照。
- 4) 袴谷「(III)」326-325 頁の要約。
- 5) 例えば「法蔵部と仏塔崇拜」『印度哲学仏教学』第 10 号 (1995, 84-105 頁)。
- 6) 杉本卓洲「有部教団と仏塔および仏塔崇拜」『インド思想と仏教文化 (今西順吉教授還暦記念論集)』(春秋社, 1996) 228 頁。
- 7) 大正蔵 50, 184 中。
- 8) 平川彰『大乘仏教の教理と教団 (著作集第 5 巻)』(春秋社, 1989) 393 頁。
- 8) 大正蔵 26, 87 上。
- 9) 大正蔵 26, 87 上。
- 11) 下田正弘『涅槃經の研究』(春秋社, 1997), 119-122 頁。
- 12) Hahn, Michael; *Nāgārjuna's Ratnāvalī*, Vol. 1. The Basic Texts, Bonn, 1982, (Indica et Tibetica. 1.)

- 13) 八力弘喜『「十住毘婆沙論」と『菩提資糧論』』『印度哲学仏教学』第 7 号 (1992, 132-141) 参照.
- 14) 『ラトナーヴァリー』のサンスクリット原典の残っている部分には仏塔の記述が無いので、チベット訳の *mchod rten* の原語が何であったか確定はできない. 真諦訳『宝行王正論』では一貫して「支堤」と訳されている. 本稿では主に「仏塔」の語を使うが、原語は *caitya* であったと考えられる. この時代の南インドでは仏塔を指すのに *caitya* を用いるのが一般的である. 静谷正雄『初期大乘仏教の成立過程』(百華苑, 1974) 206 頁参照.
- 15) 大正蔵 32, 535 下 24.
- 16) 大正蔵 26, 65 下.
- 17) 大正蔵 26, 64 下 18.
- 18) 大正蔵 32, 540 上 6.
- 19) 大正蔵 32, 539 下 29-540 上 1.
- 20) 大正蔵 32, 536 下 6.
- 21) 大正蔵 23, 415 下.
- 22) 瓜生津隆真『十住毘婆沙論 1 (新国訳大蔵経, 釈経論部 12)』(大蔵出版, 1994) 12 頁以下参照.
- 23) 大正蔵 26, 30 中.
- 24) 大正蔵 26, 68 中.
- 25) 『十地経』の梵本には *śraddhā karuṇā maitrī tyāgaḥ khedasaḥiṣṇutā śāstrajñātā lokajñātā hṛyapatrāpyam dhṛtibalādhānam tathāgatapūjopasthānam iti* とある (近藤本, p. 26).
- 26) 大正蔵 26, 68 中.
- 27) 大正蔵 26, 62 下.
- 28) 諸テキストの増広の様相は、杉本卓洲『「郁伽長者所問経」にみえる菩薩たち』(『印度哲学仏教学』第 8 号, 1993, 84-104 頁) 参照.
- 29) 第 3-33 偈で捨離すべき 57 の煩惱 (dosa) を説く. これは『阿毘達磨法蘊足論』の雜事品第 16 に依拠している: Okada, Yukihiro und Hahn, Michael "Zur Quelle der 57 Fehler in der Ratnāvalī des Nāgārjuna" *Indo Iranian Journal* 28, 1985, 123-134 参照.
- 30) 静谷正雄氏は「原始大乘経典」に見られる仏塔信仰に関して, 1. もっぱら仏塔信仰を作仏受記を得る道として勧めるもの, 2. 在家菩薩の功德多き善行の一つとして勧めるもの, 3. 従来の仏塔信仰を説くことをやめて真の仏塔とは何かを問おうとしているもの, という三種に分けている. 静谷, 前掲書 (注 14), 213 頁参照.

〈キーワード〉 ナーガールジュナ, 仏塔, 『ラトナーヴァリー』, 『菩提資糧論』, 『十住毘婆沙論』

(神戸女子大学瀬戸短期大学教授, Dr. Phil. Bonn)